

事例報告「教室内飼育の成果と課題」

森田和良



I 教室でのモルモット飼育の概要

1 触れる楽しさが困難さを克服する

私の学級（2年生）では、1グループ10人で1匹、合計4匹のモルモットを教室内で飼育している。このことは担任である私の提案から始まった。モルモットを学級で飼い始めると、モルモットに関する情報は学級全体の関心事となった。一人の子どもの発見を学級全体で共有できた。それは、誰もがこのモルモットを飼っている、自分の学級のモルモットであるという意識がもてるからである。

さらに、共同で飼育することで、生き物とのかかわりだけでなく、児童同士のかかわりや、家庭同士のかかわりも深まってくるのである。

飼育のゲージは、衣装ケースを用いた。その中に新聞紙を敷いて、モルモットフードや野菜、水を与える。毎日、朝と放課後には新聞紙を交換し、えさと水を与える。

今日は、私は学校に行ってモルモットの世話をしました。そして、モルモットのお世話をしているときに、朝の活動の時間が来てしました。でも、モルモットのほうをちゃんとやってから朝の活動に出ました。モルモットは、見ただけでふわふわしているように見えます。手でさわるともっとふわふわして気持ちいいです。今日モルモットのお世話ができてうれしかったです。（I子）

そして週末には、モルモットを各家庭に持ち帰り世話を。家庭では、大好きなモルモットが独り占めできるのである。

今日は朝から晩までモルモットと遊んでいました。昨日からモルモットを一人じめにしたかったです。そして、私は大発見をしました。モルモットが大きな声で「キーキー」となく、かならずおしつことうんちをするということです。人間の赤ちゃんと同じです。モルモットはえらいと思います。（U子）

飼育し始めた頃は、モルモットに触れることが楽しく、世話の苦労やもち帰りの困難さは、この楽しさに比べれば大したことではなかったようだ。

2 共同の飼育活動が新たな様式を生み出す

週末になるとモルモットは子どもの家へ行く。持ち帰る子どもは、自分の荷物以外にもモルモットのケースとえさ、飼育日記、ゴム手袋等の道具を抱え、電車やバスで帰るのである。なかなかの重労働だ。このような状況が、友達の協力する姿勢を生み出す。駅まで荷物を分担して持ったり、同じグループの児童同士が一緒に帰宅したりするようになって行った。

今日は初めてモルモットをもって帰りました。帰るときは荷物がありすぎて重たかったです。でも、同じグループの友達が少し手伝ってくれて助かりました。家に帰ったら、まず新聞を2回も変えてあげました。えさは、にんじん、キャベツ、モルモットフードをあげました。にんじんをあげるととびついてくるみたいに見えました。ぼくは、そのときモルモットをじーと見つめていました。（H男）

このようにモルモットの飼育という活動が、子どもの生活に刺激を与え、モルモットは勿論、その飼育にかかる友達や家族へ新しい“心づかい”が生まれ始め、子どもの中に新たな生活様式ができ始めた。モルモットが個人のペットであればこのような動きは生まれにくい。飼育に参加しているみんなのモルモットという意識が、“心づかい”を生むのである。

3 多様な価値観のぶつかり合いから、新たな文化が生まれる

ところが、モルモットの飼育に慣れてきてモルモットに対する関心が低くなった頃、ある子どもの不満が爆発した。

いつも週末になると思うことです。モルモットの持ち帰りについて自分勝手な人が多いということです。モルモットの奪い合いという

ことではありません。ほとんどの人が「今日はだめ、都合が悪い」と言い訳をして先に帰ってしまいます。私は何回もあざかりました。11月は2回もあざかりました。私はモルモットをあざかるのをいやがっている訳ではありません。みんなの態度に腹をたてているのです。今週がだめなら来週都合をつけるとか、そういう気持ちがみんなにはないみたいです。みんなのモルモットなんだから、みんなでお世話するのが本当だと思うし、私はそうしたいのです。あざからぬでラッキーという気持ちが、みんなからただよってきます。私のいかりは、ばくはつ寸前です。私が前に作った持ち帰り順番表は、今やボロボロのただのゴミに成り下がりました。

冬を越したら、モルモットたちに赤ちゃんがうれます。しばらくすると、その赤ちゃんモルモットをもって帰ると思います。そうすると、今モルモットに見向きもしない人達は、きっと言うでしょう。「〇〇さんや〇〇くんは、モルモットをたくさんもって帰っているから、今度は私たちがもって帰る番だよ」そういうひどい言葉を想像してしまうのは、被害妄想でしょうか。

モルモットはきっと早く子どもがほしいと思っているでしょう。私もそうです。でも、赤ちゃんのことで言い合いになったり、けんかになったり、おたがいの思いやりのなさを見せ合うことになるのなら、赤ちゃんは生まれて来ない方がいいかなと思ったりします。

さっそく、この日記の内容を児童に紹介した。子どもの世界のこととはいいながら、ここに至るすべての子どもの言動が、子どもたちだけで形づくられている訳ではない。教師も含め子どもの周囲にいる大人の価値観の影響も大きい。当然、それぞれの家庭にも事情がある。預かりたくても預かれないと起きるだろう。しかし、それらを乗り越えて何とかしようとする子どもと、困難さから逃げようとする子どもとが出てくる。そこには、まさに、その子どもの“生き方”が表出するのである。

困難さを受けた子どもが優れていて、避けた子どもは劣っていると主張しようというのではない。私自身も、自宅でモルモットを飼っているが、毎日の世話は口で言うほど容易いものではない。

ここで大事なことは、このような問題を子供達が本音を出し合い、どうやって解決していくのかということではないだろうか。

無責任だと批判するのは簡単だが、それで問題

がすべて片付く訳ではない。無責任な行動をとってしまうその背景は何なのか、そして、どのような手立てをとればモルモットを飼い続けられるのかを、本音で語り合うことが必要である。このときに、自分とは違った価値観に出会う。そして、自分の価値観だけでは通用しない現実を知って、その問題を解決する行動様式を創出するのである。ここに子どもたちの新たな文化が生まれるのであろう。この文化は、この集団の新しいルールとして受け入れられ、学級という集団も発展していくのである。

4 支えてもらう飼育活動から、臨機応変な対応が生まれる

この一件から飼育活動も順調に進んでいたが、再びトラブルが発生した。

モルモットを自宅へ持ち帰る日、1匹のモルモットが教室に置き去りになった。順番にあたっていた子に用事ができたため、母親がモルモットを教室に取りにくる約束だった。ところが、その事情を知らない同じグループの子どもたちは、もって帰るはずの子が既に帰宅してしまったことに気づき慌てた。仕方なく別の子がモルモットをもち帰った。その後に教室に来た母親は、残っているはずのモルモットがいないのでびっくりして捜し回ったという事件だった。

ここで、子どもたちの臨機応変な対応が見られた。モルモットの居残りに気づいた子がモルモットを教室に放置しても、それは順番に当たった子どもの責任で、残した子どもの責任ではない。それなのに、残されたモルモットのことを第一に考えて、世話をする苦労や予定外の持ち帰りを引き受ける負担感を乗り越えて対応してくれたのである。

この事件以降、子ども達は順番を話し合いで決める、事前にもち帰りを確認する、都合が変われば柔軟に順番を入れ替える等の対応できるようになってきた。勿論、これらは子どもだけの力で実現したのではない。子どもの相談にのってくれる家庭、他の家庭の都合を事前に伺ってくれる保護者の協力があってのことである。

それらの行為が保護者の指示に従ったものではなく、子ども同士のやり取りの中で成立しつつあるを感じている。保護者の支援を受けつつ、徐々に自分の判断で物事を決められるようになってきているのである。

このように、初めて飼育する子どもが、教師や保護者、慣れている友達に支えられて活動に参加し始め、徐々に自分が中心になって責任のある決断ができるようになっていくことが大事なのであ

る。

最初は慣れた他者の支えを受け、そこで少しづつ物事を決めて行くために必要な手続きを学んでいく。また、発生したトラブルを解決していく。それらの過程から、必要な手続きを学び取っていくのである。

このような「参加的な活動」によって、参加した子どもの価値観や生き方が発展していくとともに、これらの手続きを経ることで学級の文化が創り出されて行く。そして、それがその学級の風土となっていくのである。

5 大切に育てる心が工夫を生んだダイエット作戦

子どもは、自分たちのモルモットを大切に育ててきた。

ところが、大事に育てるあまり、えさも豊富に与え過ぎた。また、狭いケージに入れているので、運動不足にもなった。最初は500g程度のモルモットが、最近は1kgを越えるようになった。獣医さんからも、「ダイエットをさせなさい」と言われてしまった。

ついに、モルモットのダイエット作戦が始まつた。

週末に家庭にモルモットを持ち帰ったとき、広い庭や公園で遊ばせるようにしてもらった。それから総合の時間に、モルモットを広場に連れて行き遊ばせた。

ところが、これではダイエットにならないと分かった。なぜならば、モルモットは草むらに生えているオオバコが大好物だったからだ。オオバコを見つけては食べ続けるばかりで、運動よりも食べている方が長かったのである。ダイエットどころか、ますます体重が増えてしまった。

昇降口前のコンクリートや教室前のベランダでの運動を試みた。しかし、熱射病になる危険性や、猫やカラスに襲われる危険もでてきた。このままでは命にも影響するのではないかと心配になり、必死で考えた結果、教室内で放し飼いにすることを考え出した。

試しに授業中にモルモットを教室内で放し飼いにしてみた。すると、モルモットは子供達の机の下を自由気ままに歩きだした。子供達は、自分の足元にモルモットが来ると、喜んでしまって授業どころではない。授業に身が入らない。もっと良い方法はないかと考え、柵を作つてその中で遊ばせる方法を考えた。柵を作れば、その中で運動もできるし、外に逃げる心配がない。授業にも支障は少ないと思った。さっそく、柵作りが始まった。家から板切れを集め、簡単な柵を作り始めた。

これがなかなか大変な作業になった。子どもは、ノコギリで板を切つたことがない。また、金づちでクギを打つことがない子どももいた。指を間違つて打つ子どもが続出。クギが曲がつてもそのまま打ち続けるので、クギがグニャグニヤになって板にめり込み、板を貫通することがなかなかできない。失敗して曲がつたクギが山のようになつた。

作業は困難を極めたが、子どもは時間を忘れるくらい作業に熱中した。柵ができあがると、今度は柵に色をつけた。絵の具やペンキで色をつけた。中には意図的に色をつけないグループがあつた。理由を聞いたら、モルモットは板を噛むことがある。もし、ペンキで色をつけてしまうと、板を噛んだときにペンキを食べてしまうかもしれないと考えたというのである。モルモットの体を気遣つたのである。子どもながら良く気が付くものだと感心した。

柵で作ったサークルにモルモットを入れてみた。モルモットは柵に沿つてうろうろ動き出し、ときどきフンをする。おしつこもする。新聞紙を敷き詰めて柵をする方が良いことに気づいた。ダイエットも順調に進む。

午前の授業中は、この柵の中でモルモットを放し飼いにした。時々、脱走するモルモットもいるが、気が付いた子どもが静かにモルモットをもとに戻すようにした。この作戦の結果、見事にダイエットが成功し、100グラム近くも減つたモルモットも出るようになった。

6 クラス替えを目前にした“思い出づくり”

この学級のクラス替えが近づいてきた。4匹のモルモットもこのまま飼い続けることはできない。残り少ないモルモットとの時間を大切にするとともに、モルモットとの思い出を残そうということで、「総合活動」の時間を使って新しい企画に取り組み始めた。

あるグループは、モルモットとのかかわりをVTRに残す。また、別のグループは、デジタルカメラを使ってのアルバムづくり、また、別のグループは、モルモットの実物大の人形作りに取り組み始めた。再び、モルモットを軸に、学級の総合活動は動き始めた。

II 動物との触れあいと子どもの成長

1 命の責任を背負う“飼育”

S子が、モルモットのことを日記に書いてきた。

11月11日（土曜日）

キーちゃんが、私の家に来ています。とってもかわいいです。けれど、このごろキーち

やんに、大変なことがおこってしまいました。それは・・・

昨日の朝、学校でT君がキーちゃんの新聞をかえていると、T君が、「何だかフンが、小さ~い」と、言っていたので、見てみると、フンの数は少なくて、とっても小さいです。どうしたのかな~。心配。先生、どうしてか、分かりますか。分かったら、教えてください。

11月12日（日曜日）

今日の朝、キーちゃんの様子を見てみると、フンはたくさんしていました。良かったー。けれど、まだフンの大きさは、小さいです。エサは、ちゃんと食べています。それに、元気もあります。どうしてかな~。少し心配です。キーちゃんは、このごろキャベツをけっこう食べています。

「キーちゃん」というのは、学級で飼育しているモルモットの名前である。この日記でも分かるように、週末はモルモットを各家庭に持ち帰り、子どもが世話をしている。S子は、持ち帰ったモルモットのフンの大きさの変化に気づき、心配でこのような日記を書いた。

フンの数や大きさ、フンの状態などが気になるのだ。それは、「自分のモルモット」という意識を強く持っているからだろう。もし、学校の飼育舎で飼育していたら、このように細かな点に気を配ってくれるかどうか疑問である。

なぜならば、飼育舎で飼育されている動物と子どもとのかかわりは、自分の気が向いたらえさを与える、一緒に遊ぶ程度にならざるを得ない。つまり、人間の気分次第になる。飼育委員となれば別だが、低学年の子どもにとっては、せいぜいこの程度のかかわりだろう。これでは、糞尿の始末やケガや病気の手当、休日の世話、など、面倒な部分はほとんど背負わなくて良い。このようなかかわりでは、生き物を飼育している実感はもてない。都合の良いペットである。

動物を飼育するということは、かわいい、えさを喜んで食べてくれる、一緒に遊んでくれるという、楽しい部分だけではなく、糞尿の始末やケガや病気の手当、休日の世話も含めて、飼育なのである。動物の命を預かっているという責任がかかるものなのである。

面倒な部分は、飼育委員の子どもや先生に任せるのであれば、あまりにも“つまみ食い”的な飼育と言わざるを得ない。飼育では、手をかけ時間をかけるから、そこにじわじわと“情”が芽生えていく。時間と手間をかけることなく、効率よく何かを身につけようとしても、それは無理なこと

ではないだろうか。21世紀という科学が進歩した時代であっても、この時間と手間は、捨ててはいけない“面倒くささ”ではないかと思う。我が学級の子どもの姿から、そう感じるのである。

2 生き物を学習で扱う意義

生き物を学習で扱う利点は、次の点が考えられる。まず、子どもは生き物に対して関心をもちやすいこと。次に、反応が多様で予想外のことが起きやすいこと。さらに、生き物に触れることで命を感じ、生きる営みにかかわることで感動を味わえること。また、言葉が通じないので、相手の表情や仕草から相手の心を読み取らざるを得ない状況に置かれ、自分の対応を振り返らざるを得ないこと。

さらに、生き物を自分の手で育てるこによって、生き物に対する愛情、やさしい心遣い、安定した気持ちなどが芽生えてくる。言葉は通じなくても心が通じるという実感、生きているうれしさの実感など、生き物を育てるこによっておのずと生まれ育っていく「心の働き」は、人間としても大切な資質であろう。

最後に、生き物を育てることはたいへんな責任を負うということを自覚できることである。狭い場所に閉じ込められた生き物にとって、自分の環境は与えられたものであって、自分の意志ではどうすることもできない。決められた場所で食事をし、そして排泄もする。さらにそこで寝起きをして、場合によっては子どももそこで産み育てる。生きていく上のすべての営みを、狭い飼育小屋や飼育ゲージの中で行わなければならない。したがって、その生き物を飼っている人間の世話の仕方に、すべての環境が左右されてしまうのである。

このことの意味を、飼っている人間は自覚する必要がある。つまり、狭い飼育小屋に動物を入れた瞬間から、その動物の住んでいた自然が動物たちに与えて来た様々な恵みを、飼い主が自然になりかわってその動物に与えることが義務として発生するのである。

生き物を育てる営みは、このような様々な人間として重要な資質や能力を育てるのに有効に働くのである

3 集団で飼育するからこそ、学べたこと

モルモットの飼育を始めて2年がたった頃、1匹のモルモットが死んだ。その死を契機に自分の飼育を振り返ったU子は、次のような作文を書いた。

ショックだった。そして悲しかった。学校で泣いたことは何回かあるが、これほどまでに心がいたかったことはない。人間を含めて